

西洋医書の翻訳用語について

大友 信 一

わが国の身体語彙を含む医学関係の語彙は、中国起源のものが多く、しかも、たとえば平安時代の百科辞典、源順撰の『倭名類聚抄』（元和本に拠る）（巻第三形躰部第八）には、形体に関するもの、首・頭・顛・髑髏・腦・頤会など一五〇余と疾病に関するもの、灸・頭風・聾・聾耳・盲など一一〇余が収載されているに過ぎない。以後、中国医学の五臓六腑・経絡式の旧態依然たる状態と歩調を合わせて、わが国の医学関係の語彙が、格別増加したといった変化はみられない。したがって、あの画期的とされる、腑分けを試みて記録した、山脇東洋の『蔵志』にしても、照合された語彙は、肺・心・肝・膽・腎・脾・胃・膀腸・小腸・膀胱など五〇余のみである。

ところが、西洋医書が将来され、明和八年（一七七二）三月四日、西洋医書の一つ、いわゆる『ターヘル・アナトミア』を手にした杉田玄白等が、千住小塚原の死刑囚の解剖に立合って照合したところ、『ターヘル・アナトミア』と「誠に鏡にかけ候様に、寸分違無御座候」と驚嘆した彼等は、即刻、翌日から、この『ターヘル・アナトミア』（“Anatomische Tabellen”, 1732 のオランダ語訳 “Ontleekkundige Tafelen”, 1734）の翻訳に取りかかることになる。この漢訳した『解体新書』（安永三年、一七七四刊）が「我邦翻訳速西医籍之権輿」となるわけである。翻訳に当たっての推進者であった前野良沢が訳者の中に名を連ねていないハブニングがあったから、さぞかし誤訳が多いことかと思われるが、これがかなり

正確な翻訳であったことは、岩崎克己氏等先人の研究で明らかになっている通りである。ここで登場する医学関係の語彙は、本書が解剖の書であるために、形体に関するものだけであるが、骨節・機里爾・神経・脈道・脈・筋など七五〇余を数える。その大部分は、当然のことながら、翻訳に拠って作られた語彙であるが、即物的な命名名であるだけに確固たるものである。かつて、物対名が必ずしも明確でない語彙が、一五〇余であったものが、物に即した語彙が六〇〇余も増加したわけである。この意味で、『解体新書』の、医学用語に果した役割は、高く評価されなければならない。

しかしながら、オランダ語の能力の未熟さと西洋医学の知識の不十分さから、適切な訳語になっていないものも多く、この欠を補ったのが、大槻玄沢の『重訂解体新書』（文政九年、一八二六刊、附言・翼再識は寛政十年、一七九八）である。宇田川玄真の『西説医範提綱』（文化二年、一八〇五刊）の題言に、諏訪俊が、『解体新書』と『西説医範提綱』との用語の異同について六八ほど述べ立てた事などから、『重訂解体新書』の存在が等閑視されることになったのは遺憾である。たとえば、『解体新書』とは異なる、玄真が初めて使用した用語として、「甲状軟骨・鎖骨・薦骨・視神経・聴神経・嗅神経・胃液・小腸・大腸・脾・膈・尿道・輸精管・腺・腱・腹膜・織維・靱帯・脂肪・（心臓の）右室・左室・心耳」を挙げる方がおられるが、この大部分は『重訂解体新書』における玄沢の用語であり、違うのは、視神経（鑿神経）・小腸（薄腸）・大腸（厚腸）・脾（臍）・尿道（ことばはあるが違うものを指す）・腺（濾胞）・織維（襍）・靱帯（繫帯）の八のみである。

玄沢が玄白の命を受けて、『解体新書』の訂正に当たったわけであるが、その際の態度を、玄沢は「重取ニ原書ニ反復玩味審稽ニ正文ニ細搜ニ註證ニ考ニ素群書ニ旁ニ羅百氏ニ又屢々解体以徴ニ諸實景ニ敢奮ニ編摩之志」のように述べている。したがって、誤訳がなくなつたばかりか、従来、音訳したままになっていた大機里爾汁を臍液、因的兒孤私太利亜を臆、意利亜を廉、印的爾須毘那礼私を項椎間刺などとすべて翻訳したのである。

そのうえ、訳語の正確を期すために、『翻訳名義集』に倣って、『翻訳新定名義解』を著わし、その訳語を当てるに至つた

経緯を述べている。翻訳の方法は、『解体新書』の翻訳・義訳・直訳、『和蘭医事問答』の対訳・義訳・直訳を踏まえて、あらたに直訳・義訳・対訳の三としたが、この直訳・義訳（意識）・対訳（音訳）は、今日の翻訳の方法の先駆となっている。

私は、『西洋医書の翻訳用語』に果した大槻玄沢の偉業をここに明らかにするとともに、『洋学史事典』などにまったく取り上げられていない『重訂解体新書』の存在意義を訴えたいのである。

（岡山大学文学部）